

約半数の高校が、アクティブラーニング型などの 一方向的ではない授業を導入 —高校の進路指導・キャリア教育に関する調査2014—

株式会社リクルートマーケティングパートナーズ（本社：東京都千代田区 代表取締役社長：冨塚 優）が運営する、リクルート進学総研（所長：小林 浩）では、高校の進路指導・キャリア教育の現状を明らかにするため、全国の全日制高校の進路指導主事に対して進路指導の困難度、キャリア教育の進捗状況等についての調査を実施いたしました。このたび調査結果がまとまりましたので、一部を抜粋してご報告申し上げます。

調査リリース

※出版・印刷物へデータを転載する際には、“「高校の進路指導に関する調査2014」リクルート進学総研調べ”と明記ください。
リクルートマーケティングパートナーズではこれからも、ひとりひとりにあった「まだ、ここにはない、出会い。」を届けることを目指してまいります。

【本件に関するお問い合わせ先】
https://www.recruit-mp.co.jp/support/press_inquiry/

【調査概要】

- 調査目的：全国の全日制高等学校で行われている進路指導・キャリア教育の実態を明らかにする
 - 調査期間：2014年10月6日(月)～10月31日(金)投函締切（11月5日(水)到着分まで集計対象）
 - 調査方法：質問紙による郵送法
 - 調査対象：全国すべての全日制高校の進路指導主事4,838人
 - 集計対象数：1,140人（回収率23.6%）
- ※隔年で実施している調査

【高校生価値意識調査2014】

- ・ 調査目的：高校生の将来イメージおよび進路選択に対する価値意識を把握する
- ・ 調査期間：2014年4月4日（金）～4月8日（火）
- ・ 調査方法：インターネット調査
- ・ 調査対象：2014年3月時点の高校1～3年生のうち、進学希望者
 ※対象数は条件に該当した者から、平成25年度学校基本調査（確定版）の「全日制・本科生徒数（県別）」を基に、関東／東海／関西／その他エリアの4つのブロック別に、回収数が実際の生徒数の比となるように設定、集計に際し4ブロック毎の男女構成比に沿うよう補正している
- ・ 有効回答数：1,438人

【進学センサス2013】

- ・ 調査目的：高校生の進路選択プロセス（行動・意識）の現状を把握する
- ・ 調査期間：2013年3月19日(火)～4月8日(月)投函締切（4月15日(月)到着分まで調査対象）
- ・ 調査方法：質問紙による郵送法
- ・ 調査対象：2013年に高校を卒業した全国の男女50,000人
 ※平成24年度学校基本調査の「全日制・本科 3年生生徒数（県別）」を基に、リクルートが保有するリストより調査対象とする数を算出
- ・ 有効回答数：4,985人（回収率10.0%）
 ※本プレスリリース該当「進路指導時に進学先として重視する点」は、大学進学者の3,256人が対象

【回答校プロフィール】

■ 高校所在地（全体／単一回答）

	調査数	北海道	東北	北関東・甲信越	南関東	東海	北陸	関西	中国・四国	九州・沖縄	無回答
2014年 全体	1140	7.1	11.4	11.8	16.8	13.5	2.7	12.0	11.3	12.5	0.8
2012年 全体	1179	7.5	10.3	11.5	17.3	12.7	2.4	13.2	11.6	12.9	0.5
2010年 全体	1208	7.9	10.1	11.9	17.5	11.6	3.0	12.7	12.4	12.2	0.7

■ 高校タイプ（全体／単一回答）

	調査数	普通科単独校	普通科中心で学科併設校	総合学科単独校	総合学科併設校	工業を中心とする高校	商業を中心とする高校	家政を中心とする高校	農業を中心とする高校	その他	無回答
2014年 全体	1140	54.6	20.1	5.2	1.1	5.9	3.2	0.4	2.4	5.4	1.8
2012年 全体	1179	54.3	19.1	5.8	1.3	5.8	3.4	0.4	2.0	4.7	3.2
2010年 全体	1208	53.0	20.4	6.5	1.0	5.5	4.5	0.2	3.5	4.2	1.3

■ 大学短大進学率（全体／単一回答）

	調査数	70%以上	40～70%未満	40%未満	無回答
2014年 全体	1140	46.5	18.6	34.1	0.8
2012年 全体	1179	45.7	19.8	32.9	1.6
2010年 全体	1208	41.5	21.1	36.7	0.7

【アクティブラーニング型教育の導入状況】

■約半数の高校が、アクティブラーニング型※などの授業を実施。

- ・アクティブラーニング型授業への転換などを実施している高校は全体の47%。実施していない高校（34%）を上回る。
- ・大学・短大進学率別にみると、進学率が高いほど実施率が高く、大学・短大進学率70%以上の高校では実施率は57%と、半数を超える。

■アクティブラーニングなど授業改善の実施（全体/単一回答）

	(%)	導入・計			取り組み状況を把握できていない	取り組んでいない	無回答	導入・計
		学校全体で取り組んでいる	学校全体での取り組みではなく、教科で取り組んでいる	学科や教科など組織的な取り組みではなく、教員個人で取り組んでいる				
*凡例								
2014年 全体	(n=1140)	8.7	12.0	26.4	17.7	33.5	1.7	47.1
設置者別								
国公立	(n= 836)	9.1	12.7	26.6	17.7	32.5	1.4	48.3
私立	(n= 295)	7.8	10.5	26.1	17.6	36.3	1.7	44.4
大短進学率別								
70%以上	(n= 530)	10.6	13.0	33.0	14.0	27.9	1.5	56.6
40~70%未満	(n= 212)	8.5	11.8	22.2	20.3	36.8	0.5	42.5
40%未満	(n= 389)	6.4	11.1	19.8	21.3	39.3	2.1	37.3
高校所在地別								
北海道	(n= 81)	4.9	17.3	29.6	16.0	32.1	-	51.9
東北	(n= 130)	6.9	10.8	29.2	16.2	34.6	2.3	46.9
北関東・甲信越	(n= 134)	6.7	9.7	15.7	26.1	41.0	0.7	32.1
南関東	(n= 192)	11.5	11.5	37.0	15.6	22.9	1.6	59.9
東海	(n= 154)	9.1	9.7	22.7	18.8	37.7	1.9	41.6
北陸	(n= 31)	12.9	19.4	22.6	12.9	32.3	-	54.8
関西	(n= 137)	8.0	12.4	27.7	16.8	32.1	2.9	48.2
中国・四国	(n= 129)	12.4	17.1	20.2	14.0	35.7	0.8	49.6
九州・沖縄	(n= 143)	7.0	9.8	27.3	18.9	35.7	1.4	44.1

※参考 アクティブ・ラーニングの定義（文部科学省）

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」

（『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』平成24年8月28日中央教育審議会）

→本調査ではこの定義は提示せず、「アクティブラーニング型授業への転換など、一斉講義型ではない授業への授業改善を行っていますか」と尋ねた。

【今後必要とされる能力・現在生徒が持っている能力】

■ 将来社会で必要となるにもかかわらず、現在高校生が持っていないと感じている能力は、“主体的に行動する力”。

■ 一方、実際に持っている力としては、「規律性」「傾聴力」など、“チームワークで働く力”が高い。

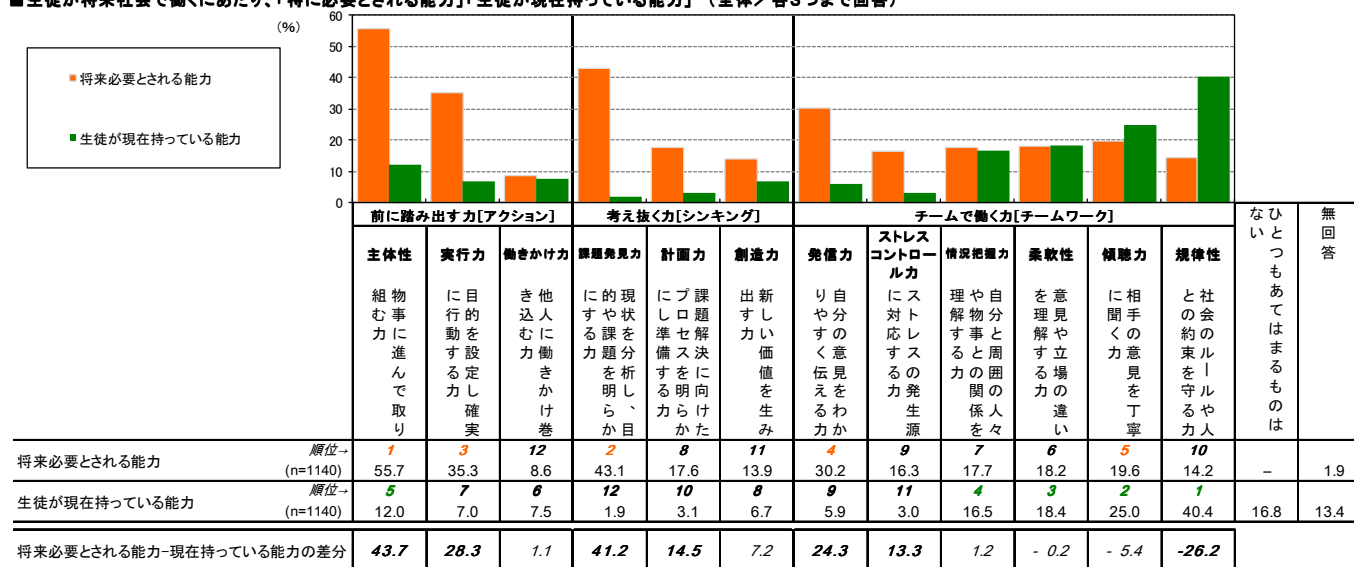
※“将来社会で必要となる力”の選択肢には、経済産業省による「社会人基礎力」を使用

・ 将来、社会で必要とされる能力としては高いが、実際に高校生が持っている能力は低く差が大きいのは「主体性」「課題発見力」「実行力」など“主体的に行動する力”。

- ・ 生徒が将来社会で働くにあたり、必要とされる能力
1位：主体性（56%） 2位：課題発見力（43%） 3位：実行力（35%）
- ・ 生徒が現在持っていると思う能力
1位：規律性（40%） 2位：傾聴力（25%） 3位：柔軟性（18%）

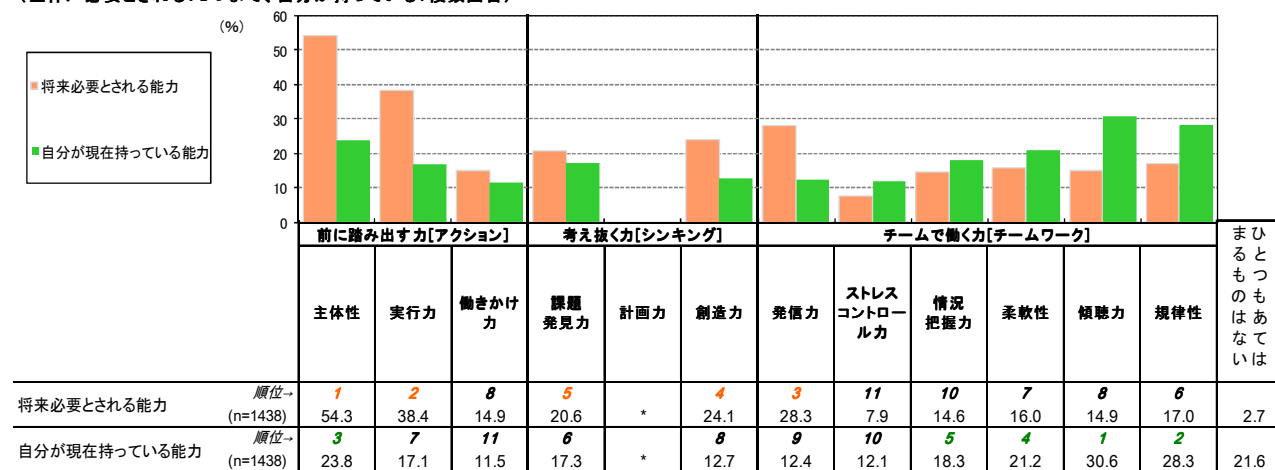
※**高校生の意識との比較**（小社が2014年4月に実施した『高校生価値意識調査2014』）
将来必要となる能力は「主体性」「実行力」「発信力」、現在自分たちが持っている能力は「傾聴力」「規律性」と、教員の傾向とほぼ一致している。

■ 生徒が将来社会で働くにあたり、「特に必要とされる能力」「生徒が現在持っている能力」（全体/各3つまで回答）



■ 参考：高校生側の認識：高校生価値意識調査2014

【高校生価値意識調査2014】将来社会で働くにあたり、「特に必要とされる能力」「自分が現在持っている能力」（全体/必要とされる：3つまで、自分が持っている：複数回答）



【進路指導：難しさに対する考え】

■ 9割の教員が、進路指導を「難しい」と感じている。

- ・ 高校における進路指導の難しさについて、「難しい」と感じている割合は90%に上り、2012年調査（前回）の91%から高止まりとなった。
- ・ 高校の大学・短大進学率別に「非常に難しいと感じている」割合を2012年調査と比較すると、全体が減少している中、「大学・短大進学率70%以上」の高校においては増加（2012年：25%→2014年：33%）しており、進路指導がより難しくなっている状況が明らかとなった。

■ 進路指導の難易度【時系列比較】（全体／単一回答）

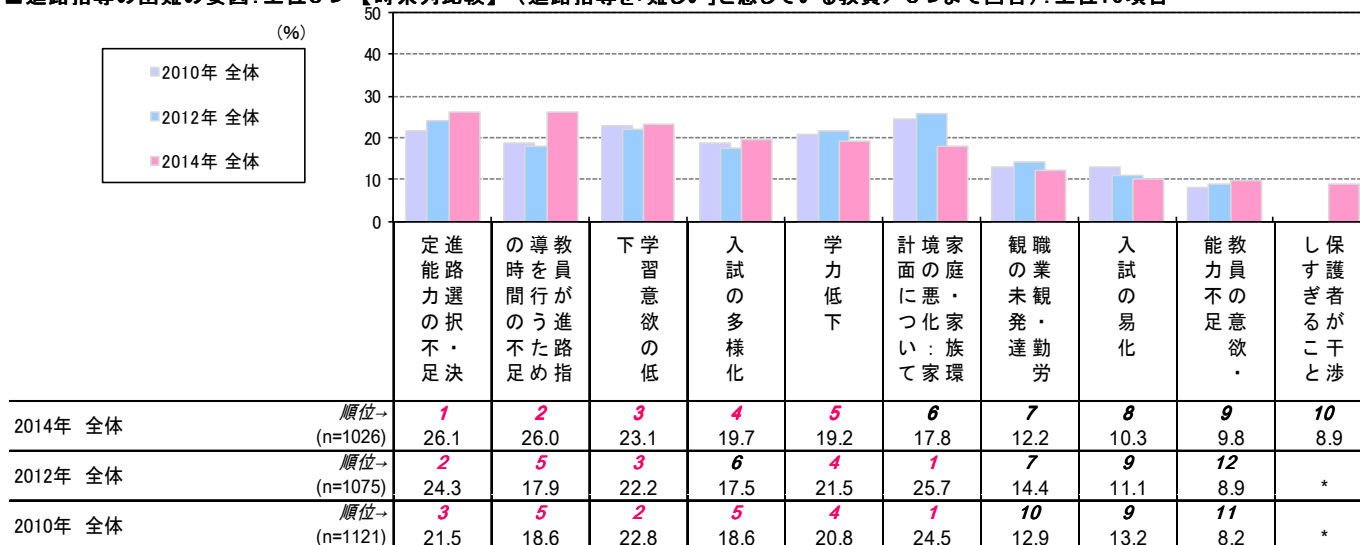
	(%)	難しい計		難しいとは感じていない	その他	無回答	難しい計
		非常に難しいと感じている	やや難しいと感じている				
*凡例							
2014年 全体	(n=1140)	31.6	58.4	8.3	0.6	1.1	90.0
2012年 全体	(n=1179)	34.6	56.6	6.7	0.7	1.4	91.2
2010年 全体	(n=1208)	38.4	54.4	5.8	0.3	1.1	92.8
2014年 大短進学率別							
70%以上	(n= 530)	33.2	55.8	9.2	0.8	0.9	89.1
40~70%未満	(n= 212)	34.4	56.1	8.0	0.5	0.9	90.6
40%未満	(n= 389)	27.5	63.2	7.5	0.5	1.3	90.7
2012年 大短進学率別							
70%以上	(n= 539)	24.7	62.2	10.4	0.7	2.0	86.8
40~70%未満	(n= 234)	42.7	52.1	3.8	0.4	0.9	94.9
40%未満	(n= 388)	44.6	50.8	3.4	0.3	1.0	95.4
2010年 大短進学率別							
70%以上	(n= 501)	26.1	63.1	8.8	0.6	1.4	89.2
40~70%未満	(n= 255)	38.0	56.1	3.9	0.4	1.6	94.1
40%未満	(n= 443)	52.6	43.6	3.4	-	0.5	96.2

【進路指導：難しさを感じる要因】

■ 難しさを感じる要因は「進路選択・決定能力の不足」がトップ。前回1位の「家計面の問題」は6位に下降。

- ・ 難しさを感じる要因については、前回調査2位の「進路選択・決定能力の不足」（26%）がトップ。2位は前回調査5位であった「教員の進路指導に関する時間不足」（26%）。
- ・ 前回調査で1位の「家計面の問題」は6位（前回26%→18%）となり、景況感や社会環境については回復の兆しを感じている一方で、生徒や学校の状況に困難を感じる教員が増加していることが明らかとなった。

■ 進路指導の困難の要因：上位3つ【時系列比較】（進路指導を「難しい」と感じている教員／3つまで回答）：上位10項目



※「2014年 全体」の降順ソート

※「*」は該当項目なし

※「教員が進路指導を行うための時間の不足」は2012年までは「教員の進路指導に関する時間不足」

フリーコメント

「進路選択・決定能力の不足」：主体性の欠如・安易な進路選択

- ・ 学習活動についても、すべてにおいて受け身の姿勢の生徒が目立つ。主体的に行動することができていない。
- ・ 将来やりたいことが無い生徒が増えた。就職に関して「教師や友人が良いと言うから」といって志望校を決める生徒もいて将来が不安になる。
- ・ 自分で考えようとしな（誰かに頼る）傾向が、強くなってきていると感じる。
- ・ 安易に、早期に進学決定したいがために、自分の興味・適性に合致しない大学へのAO、推薦入試を選択。
- ・ 合格できればどこでもいいという考えで早く進路を決定したがる。AO入試で決めたがる
- ・ 大学全入時代（少子化による）により本来大学へ進学しなかった層まで入学でき、目的意識が希薄。

「教員が進路指導を行うための時間の不足」

- ・ 補習、部活、模試の監督、担任は調査書や推薦書の書類作成に時間を取られていて、余裕がない。
- ・ 選考内容の多様化により、専門教科ではない内容を指導する時間が必要となるが、なかなか時間が取れない。
- ・ 変化する学部や学科の多様化に十分対応できない。

「学習意欲の低下」

- ・ スマホなどに時間を費やしたり、勉強しないでも選択できる安易な入試方法など、やらなくてもOKな環境。
- ・ 入試の易化のため学習意欲の低下が生じている。意欲のない生徒に意欲を持たせるのは、極めて難しい。

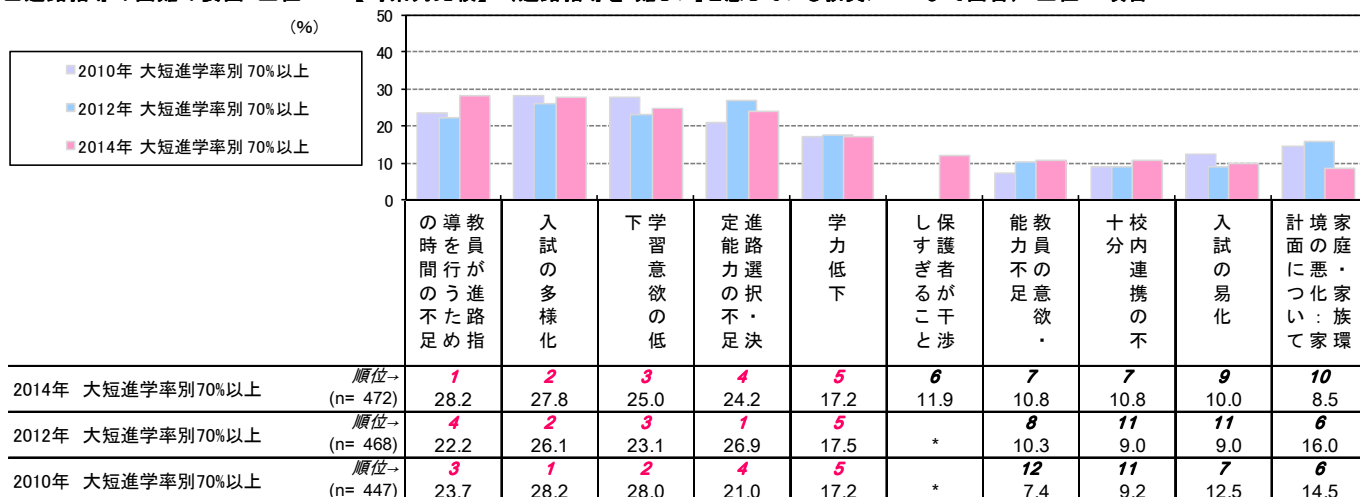
「入試の多様化」

- ・ 毎年のように変化する入試システム。AO、一般、センターなど、多様な生徒を一律に指導することの難しさ。
- ・ 新教育課程移行期、まずは完全移行後の入試の変化への対応。
- ・ 新しく議論されている大学入試が不透明。

大学・短大進学率：70%以上

「教員の時間不足」「入試の多様化」が上位に。

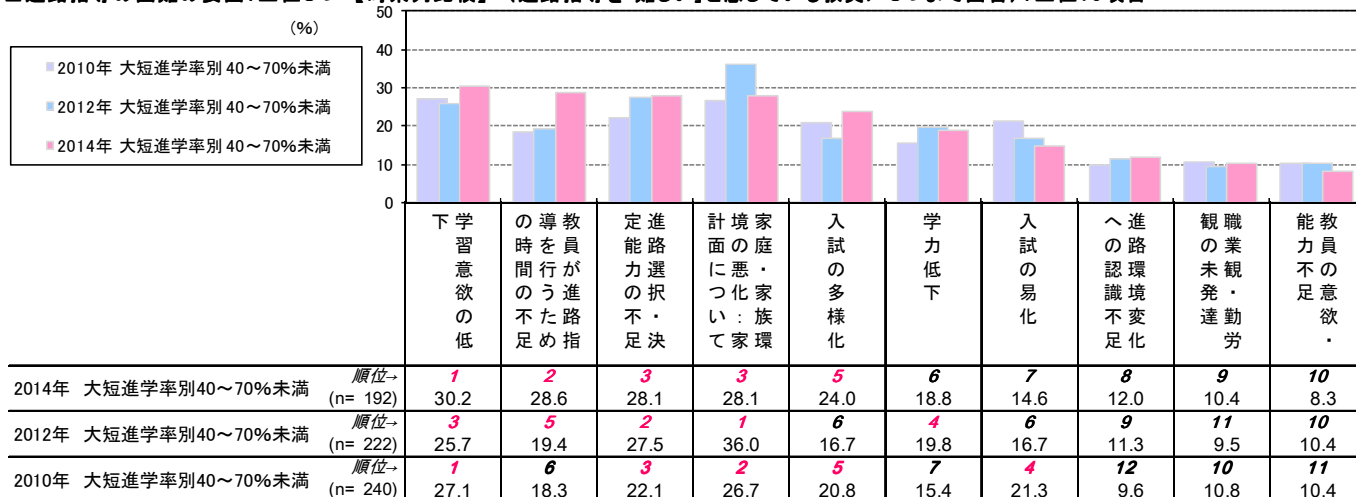
■進路指導の困難の要因：上位3つ【時系列比較】（進路指導を「難しい」と感じている教員/3つまで回答）：上位10項目



大学・短大進学率：40～70%未満

「学習意欲の低下」がトップ。

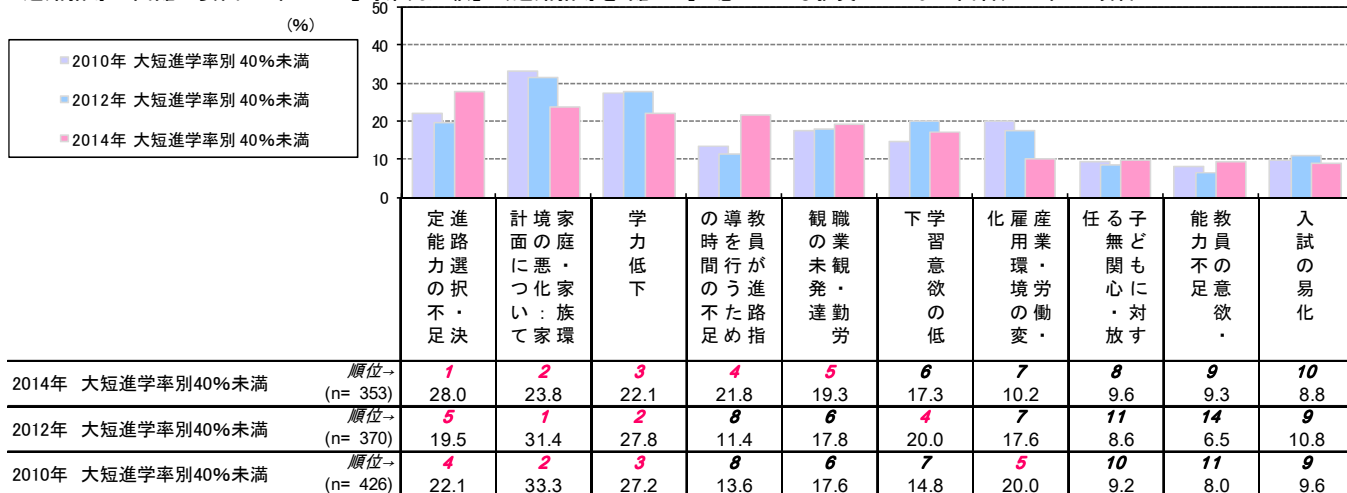
■進路指導の困難の要因：上位3つ【時系列比較】（進路指導を「難しい」と感じている教員/3つまで回答）：上位10項目



大学・短大進学率：40%未満

「進路選択・決定能力の不足」がトップ。2位に「家計面の問題」

■進路指導の困難の要因：上位3つ【時系列比較】（進路指導を「難しい」と感じている教員/3つまで回答）：上位10項目



※2014年の結果で降順ソート ※「*」は該当項目なし ※「教員が進路指導を行うための時間の不足」は2012年までは「教員の進路指導に関する時間不足」
 ※2010年 大学・短大進学率40%未満の1位は「高卒就職市場の変化」で、2014年は15位

【進路指導：生徒の進学先として重視する点（大学）】

■教員は「学生の面倒見の良さ」、 高校生は「校風や雰囲気の良いこと」を重視。

・進路指導時に生徒の進学先（大学）として重視する項目を聞いたところ、下記のような結果となった。

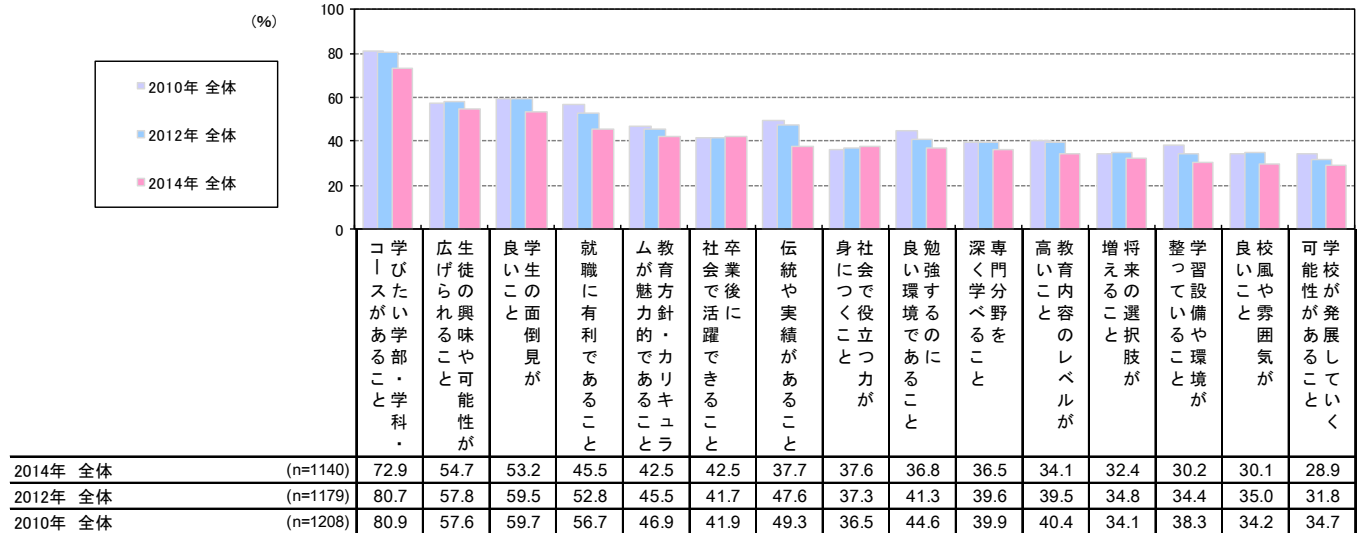
- 1位 学びたい学部・学科・コースがあること (73%)
- 2位 生徒の興味や可能性が上げられること (55%)
- 3位 学生の面倒見が良いこと (53%)

※高校生の意識との比較（小社が2013年4月に実施した『進学センサス2013』）

- 1位 学びたい学部・学科・コースがあること (75%)
- 2位 校風や雰囲気が良いこと (48%)
- 3位 自分の興味や可能性が上げられること (47%)

学生の面倒見を重視する教員に対し、
校風や雰囲気を重視する生徒と差があることがわかる。

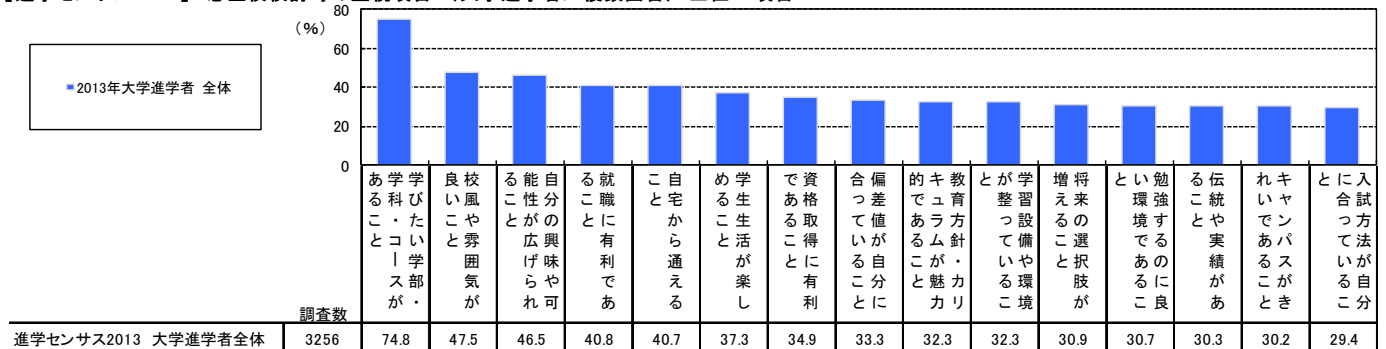
■進路指導時に生徒の進学先として重視する点【時系列】（全体／複数回答）：上位15項目



※「2014年 全体」の降順ソート

■参考：高校生側の認識：進学センサス2013（大学進学者全体／複数回答）：上位15項目

【進学センサス2013】 志望校検討時の重視項目（大学進学者／複数回答）：上位15項目



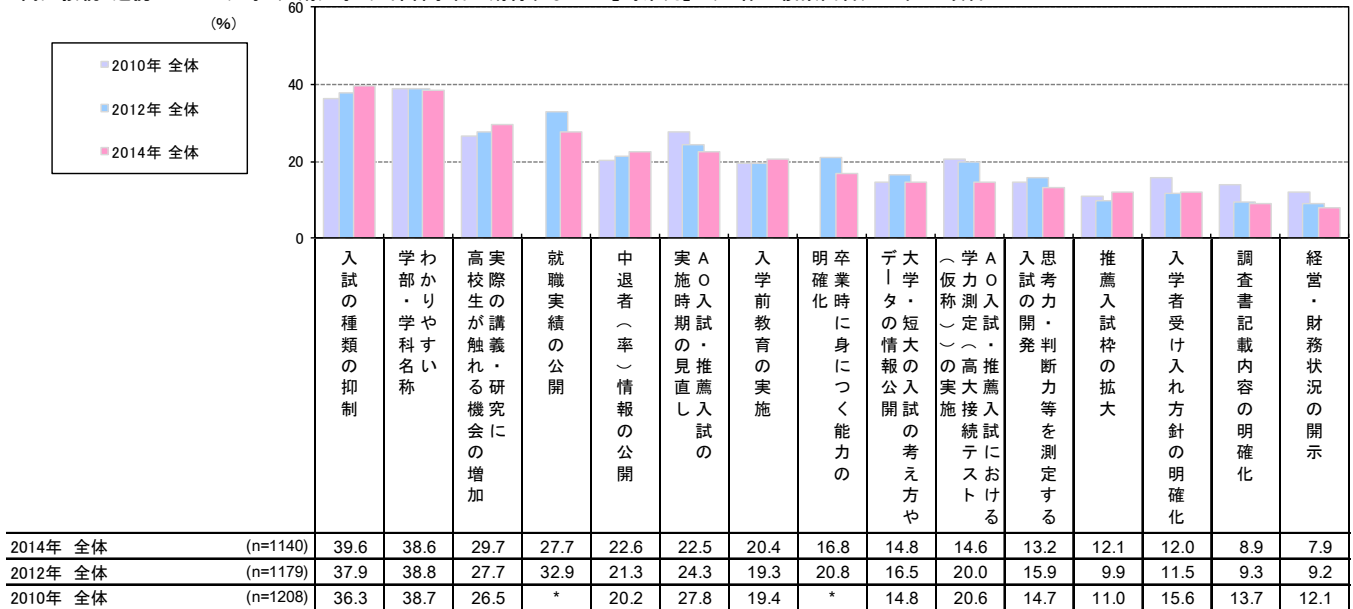
※「進学センサス2013 大学進学者全体」の降順ソート

【進路指導：高大接続の観点から大学・短期大学などに期待すること】

■大学・短期大学などに期待することは「入試の種類抑制」 経年でも上昇傾向。

- ・高大接続の観点から大学・短期大学などに期待することについては、1位が「入試の種類抑制」（40%）と、前回の2位から順位を上げてトップとなった。前々回調査(2010年) から経年で上昇している。
- ・2位は前回調査トップの「わかりやすい学部・学科名称」（39%）、3位は「実際の講義・研究に高校生が触れる機会の増加」（30%）となった。

■高大接続・連携について大学・短期大学・文部科学省に期待すること【時系列】（全体／複数回答）：上位15項目



※「2014年 全体」の降順ソート

※「*」は該当項目なし

※「AO入試・推薦入試の実施時期の見直し」：2008年は「AO入試・推薦入試の実施時期のルール化」